

【研究ノート】

大学新聞『大東文化』(1966～1973年度)にみる大学の歩み

谷本 宗生

はじめに

大東文化大学百周年に向けて、もっか関係資料調査などを悉皆的に行っているところであるが、本学の大学新聞として刊行されている『大東文化』は、なかでも本学の変遷や当該時代の息吹などを明瞭に感じることができる貴重な関係資料といえよう。今回、大学入試広報課から百年史編纂のために提供された大学新聞『大東文化』縮刷版(1966年4月～1978年2月)を用いて、大東文化大学史にかかわる特徴的な記事を1966～1973年度ごとに幾つか取り上げ検討してみたいと思う。本稿での試みは、来るべき『大東文化大学百年史』編纂における基礎作業の一環と筆者(谷本)は考えている。なお記事にかかわる参考資料として、学園総務部が刊行している『大東文化大学報』(1973年7月～1978年3月)や、本学園が記念史として編纂刊行している『大東文化大学五十年史』(1973年9月)や『大東文化大学七十年史』(1993年9月)、『大東文化大学の歩んできた道』(2016年3月)などの関係文献も補足的に用いることとする。

1 1966年度の新聞記事から(以下、[]部分は筆者(谷本)が適宜付すものである)

1-(1) 第43回入学式挙行 桜花爛漫の佳日 向学の若人一堂に会す(『大東文化』第177号、1966年4月30日、1面)

「快晴にめぐまれた去る四月五日昭和四十一年度大学入学式が挙行された。今春の大学受験者数は史上最大といわれ[略]千八百五十名の[入]学生は式場の雰囲気に緊張の面持であった。南条[徳男]学長の告辞は、現代の社会状勢を考えてか、青年としていかなる姿勢をもって勉学に励

むべきか、ということにふれられた。『[入学生]諸君が入学難といわれたこのき門[ママ]を無事合格された[略]本学は大正十二年国立[ママ]大学[の側面もある]として創立され[て]爾来、東洋文化の雄大なる思想と西洋科学の精緻なる知識を融合して、高い教養と基本的人間性の陶冶につとめてきました。創立以来四十有余年の過程において、国立[の側面も合わせ持つ]から私立へと運営の方法が移りはじめましたが、他の私立大学にみられない国立と私立の両面を体した特殊な大学であります。』

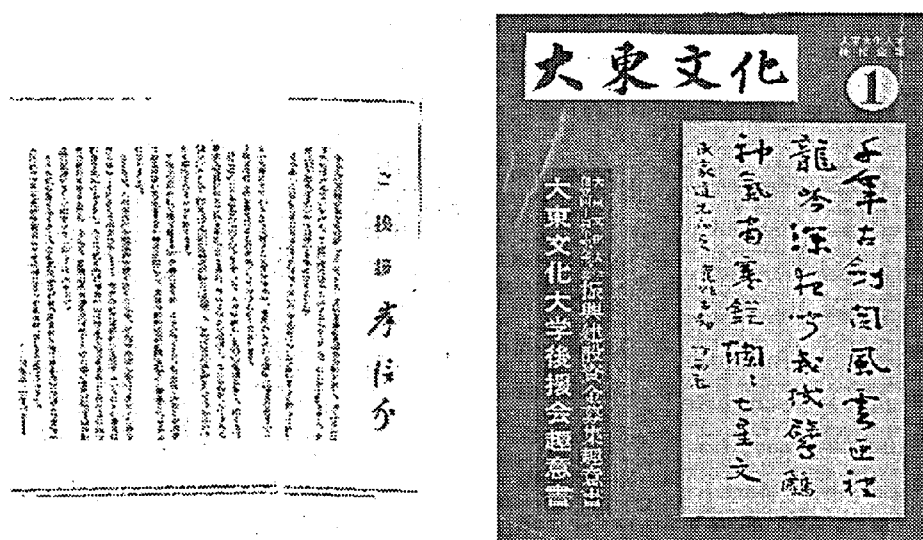
1-(2) 大学後援会と就職開拓(『大東文化』第183号、1966年10月30日、1面)

「大学生にとって一部の学生を除いては卒業後の就職問題は重要な関心事である。本学に於ては学術研究による教育体制をより以上に整えるかたわら、特に就職問題に思いを致し、万全の体勢をもって就職問題解決にあたっている。特に職場開拓について、本学後援会(会長岸信介氏)の活躍はめざましいものがある。後援会関係の会社に優先的に入社を決めるかたわら関係官庁への積極的な紹介等々、本学ならではの就職活動である。」

1-(1)で、1966年4月の大東文化大学入学式告辞を行っている南条徳男(1895～1974年)は、本学の第4代理事長(在任1961年7月～1969年5月)・第3代学長(在任1962年11月～1969年3月)を務めた人物である。南条は室蘭生れで、第二高等学校、東京帝国大学法学部を卒業し、衆議院議員となり国務大臣も務めている。東京帝大時代の同期には、後に総理大臣となり、政界引退後に大東文化大学の後援会長を務める岸信介(1896～1987年)がいたのである。本学と南条と岸の関係性について、1961年7月の大東文化大学後援会発会式で、後援会長の岸が行った挨拶で次のように言及している。岸は「なんとかわれわれ後進のものがひとつ大東文化大学建設の趣旨を十分に到達するようにお力ぞえもし、またご協力申しあげるということは、われわれの責任であり、

また現在の情勢、あるいは将来の日本の発展を考えてみると、この大東文化大学の内容を充実し、その本来の目的を十分に達成せしめるようにすることが必要であるということを痛感いたしました。微力ではありますが大東文化大学の後援会の会長を引受け、同志である南条君に大学の理事長を引受けてもらいまして、相共に協力して、各方面の同憂の士にお願いをして皆様のご協力とご支援のもとにこの大学の内容を充実し大学本来の目的を達するために後援をいたしたい」と述べ、岸が同志である南条を理事長に懇請したと明言している¹。

1-(2)にもある就職状況について、学園理事長としての南条は「学校の推せただけで就職・入社試験などをしても、入ってからあとにおいて労働組合の幹部になったり、あるいはストライキのリーダーになったりして、非常に会社の経営上不安が多い。そこで入社する学生養成等についても、安心して入社できるような学生がほしいということを知り次第でございます。かような点を考えますときに、この大東文化学園[ママ]を卒業したものは、今後普通の試験がなくても安心して入社させられるような思想の堅実なる卒業生を出したい。[略]そういう教育をすることによって、財界からも大きな支援を得るのではないかと考えます」と述べ、学生らに対する大東文化大学での堅実な教育指導を自負している²。



(大東文化大学後援会報『大東文化』第1号、1961年)

1-(3) 教養課程東松山進出決定 教育の理想郷を スイスの大学を参考に武蔵野の面影残し近代的建築(『大東文化』第179号、1966年6月30日、1面)

「元国立大学としてその特殊性と教育成果を高く評価されている本学において、大学創立四十五周年を記念し総工費八億九千万という巨額をかけ埼玉県東松山市の丘陵地帯に一大学園都市を建設して一、二年生の教養課程を移すという教育の理想郷建設にのりだすことになった。全国の四年制大学は国・公・私合わせて三百三十八校ありそのうち首都東京に所在する大学数は実に百二校というのは全大学の三十パーセントに相当する多くの大学が首都に集中していることになる。しかし現在東京における社会風俗環境をみるに、学生にとって必ずしも好ましい状態とはいえ、むしろ純粹に学問と真理の探究にはげもうとする若者にとって、はなはだうれうべき環境といえそうである。このような都内の教育的現状にかんがみ世界でも例をみない教育の理想郷を建設する運びとなった。この東松山にできる大東文化大学教養部は武蔵野をしのばせる自然の環境を利用し広大な丘陵地帯一っぱい[ママ]に学問の理想郷としてふさわしい要素を多分にとりいれている。新学園都市東松山は都心から東上線で約一時間、高坂で下車、ハイキングコースで名高い物見山に連なるなだらかな丘陵地帯に建設される。あくまで自然を生かすことを基本にしているので樹木を切り倒すことも最少限におさえ、武蔵野の自然にとけこんだ、一大学園をつくる。このように特殊な建設的意図もあって、本建設計画推進責任者の金子[昇]常任理事は一昨年秋わざわざスイスの大学におもむき、それを参考にしていることが注目される。一番高い本部のある管理塔から突端のバスターミナルまで標高差が三十メートルもあるという。用地は三つの峰に分かれているが、一番大きい第一の丘陵には校舎群、第二は主として学生を中心とした体育施設、学生センター、第三は宿舎といった具合に山の流れを利用し、頂上には極く近代的な管理塔をつくる。総工費約九億の大工事は明年の三月三十一日、

新学期使用開始を目標にすでにスタートしている。この一大事業ともいえる建設計画の責任者金子常任理事は新構想をこう説明する。『最近とみに学生再教育の重要性がさげばれている。早大騒動の例をみるまでもなく、教える者、教えられる者も情熱をもってあたらなければならない。教室や研究室は血のかよったものでなければならない。それはいままでのように都会の騒音と汚れた空気のもとで、あるいはノートを機械的におさめていけばいいという時代から脱却しなければならない。まず、ムードというか先生にも学生にも落ちついて勉強できる環境を与えてやるのが第一そして第二にはせめて教養課程の二年間はゆっくり学生生活をエンジョイしながら将来の人間形成の上で役立つような立派な社会人となる基礎をつくるために勉学とあいまって健全なる体力を養う。東松山ではすべて寮制にし、先生方の宿舎も建設するもので本当に教授、学生、あるいは学校と体育会が一丸となって生活し、勉強する。こうした“学生ぐるみ”の教育なり、運動によって大いに大東文化の精神を高めていきたい。俗界から離れた山水明美[ママ]な、まさに大学教育の理想郷にしたいとおもっている。ここで二年間じっくり勉強し、人間性を養い、三四年の専門課程は本校でやるようにしたい』このようにいわれている。』

1-(3)にあるように、「山水明美[ママ]」の立地で「教育の理想郷」を目標として開設された東松山校舎であったが、開設以来恵まれた環境に付随して、最寄りの東上線高坂駅から東松山校舎間で、安定した通学バスの運行をいかに確保するかという問題が課題視されることになる³。学生自治会を中心とした全学生との通学バス問題をめぐる団体交渉も行われるなどしたが、東武バス側が路線の縮小廃止の方向であったため、学園側が自主運行を決断し、1973年9月からスクールバスのピストン運行を開始したのである⁴。

1-(4) 文学部に英米文学科増設 ユニークな存在(『大東文化』第183号、1966年10月30日、1面)

「本学の文学部の歴史は東洋学の探究にその源を発している。その教育的成果は本邦教育界に於て高く評価されているところであるが今日の世界状勢からして西洋学の必要は欠くことが出来ずむしろ、東西洋を伴せた総合的学術研究こそ本学の意図するところとなっている。このような広範囲にわたる学術活動を通じ真に世界の文化興隆に寄与せんとするものである。英米[文]学科開設の趣旨は次のとおりである。北欧の一角に台頭し千年の長きに亘って大ブリテンの島にその発展を続け、更にその一部がアメリカ大陸に移って独特の文化を建設したアングロサクソン民族の文学活動の跡をたどり、その物の考え方を研究して高度の知識の習得と人間形成の完璧を期し、日本民族発展の資料とすることを主眼とし合せて実用的方面にも留意することを目的として昭和四十二年を期して生れるのが本学の英米文学科である。」

1-(4)にある英米文学科の新設については、「学園の財政は逼迫しており、東松山校舎建設には莫大な費用がかかり、新学科増設に要する図書購入費、教員の新規採用に伴う人件費その他の財源の捻出は容易ではなかった。そのような情勢の中で、武井亮吉[教授]は終始熱心にその必要性を説き、幸い日本文学科には佐伯梅友教授や細川清教授が、また中国文学科には竹田復教授や小嶋政雄教授などよき理解者がおり、ついに南条徳男理事長、金子昇常任理事を動かし、一九六七年の春開設の運びとなったのである」と、武井亮吉教授の尽力が大きいといえよう⁵。武井は、自身が「[東京高等師範学校]卒業以来親しくしていた福原麟太郎氏の口ききで、大東文化大学[ママ]から来ないかという声がかかって来た。当時大東文化に福原氏の同郷の友人で国会議員の宮沢裕氏が理事をしていた関係で、福原氏が私を紹介推薦したのであった。終戦の翌年即ち昭和二十一年の四月から勤務することとなり」と述べているように、1946

年に大東文化学院専門学校外国語学科の講師(英語)となり、翌年には同教授(英語)となって1970年には大東文化大学名誉教授(英米文学科)となっている⁶。

2 1967年度の新間記事から

2-(1) 給費生制度新設 四ヵ年間全額給付 募集人員三十名(『大東文化』第188号、1967年6月30日、1面)

「本学の前身、大東文化学院時代では、全学生を対象に学費一切を卒業時まで全額給費し、さらに生活費も給付して優秀な学生を受け入れ、建学の主旨に則って徹底した教育を施し、文化の発展と人類の福祉に貢献できる人材を養成してまいりました。昭和二十年以降政府資金の助成がうちきられ、その後の対象を検討中であつたが昭和四十三年度入学生以降を対象に給費生制度を施し、学業成績、人物ともに秀れたものに、四ヵ年間の学費三十九万円を給付することになった。対象学生を三十名とし、第一期給費予算一二〇〇万円を計上し、優秀な進学希望者の多数の受験を期待している。給費生募集要項 目的 本学では思想堅実にして学業成績優秀な者を選び給費生とする。その目的は在学中よく建学の趣旨を体して、文学経済各々その趣向する所にしたがって学業に精励し、率先他の学生の模範となることはもちろん、将来社会の指導的役割をはたす有為の人材を育成する意図にある。」

2-(2) まず給費試験問題を解こう 42年度問題から(『大東文化』第194号、1968年2月1日、2~3面)

「激戦をひかえ、皆さんもさぞ頭の痛いことだろう。今年も相当の厳しさが予想されるが、それに対処する力を常日頃から養っているものと思う。本学も[昭和]42年度から、在学期間の4年間に41万円(返済義務なし)支給する給費生を30名募集し、昨年11月12日、第1回目の試験にもかかわらず十数倍という好評を得ました。[略]国語・古文は文法を駆使する問題、現代文は、新聞や論説や評論などの読解力[,]漢文は

論語、孟子、唐討[ママ]選中[ママ]などが対称[ママ]となる。英語・短文ながら構文をとらえる力が必要、適語選択や作文も出題対称[ママ]となり確実な文法力がものをいう。社会・日本史は江戸時代が圧倒的で、設問法、完成法、選択法や史料設問法など。世界史は、各国の政治史、文化史を中心に記述法、空所補充注などとなっている。」

2-(3) 学内貸出金制度実施(『大東文化』第188号、1967年6月30日、2面)

「去る四月十一日、東松山教養部開校と同時に『学内貸出金制度』を実施した。これは少しでも学生生活に支障をきたさないようにとの配慮からである。都内であれば緊急止むを得ない場合などは、種々なる方法で切り抜ける対策は出来るわけであるが、教養部では、都内のようにおいそれというわけにはいかない。そこで学生達にも手許不如意で悲しい想をさせてはならない。学生に少額の金のことでも考慮させないようにと、この貸出金制度を実施したわけである。この貸出金を受ける資格は、教養部学生に限りて[ママ]一回の貸出金は参千円以内、返済期間は一ヵ月である。」

戦後も、本学においては奨学金、給費制度が整備されているが、本学の歴史的な特徴として、戦前期の創設時よりすでに給費や奨学金制度が他の私立専門学校などと比べ充実していたといえる。現在でも、「教育の大東」を掲げる本学では、経済的な理由で就学が困難な学生に対して、年間授業料の全額または半額を減免するなどした学生生活支援(あおぎり募金の一環)の努力を続けている。

2-(4) 外国語学科増設 募集定員八十名(『大東文化』第191号、1967年9月30日、1面)

「本学教育計画委員会では教学面の充実を目途に毎月定期的に会合、学部学科の増設もあわせて検討、審議を重ねてきたが、今夏『文学部に

外国語学科』の増設を決定。原案を教授会、評議員会、理事会にはかり、各会議とも全会一致で原案を承認した。この外国語学科は大学卒業までに外国語二ヶ国語(中国語、英語)をマスターさせ、さらに文学と経済学の専門科目をとりいれ、卒業後実学として社会に役立つよう配慮している。」

2-(4)に挙げられた外国語学科の新設については、学科内の専攻を当初は中国語学専攻と英語学専攻とをはっきり明記させてはどうかとの考えもあったが、文部当局との交渉過程において教員組織が必ずしも十分ではないとの判断から「専攻については細分表示せず、外国語学科として届出することとなった」とする。文部省大学学術局長から、外国語学科設置の申請に対しては「入学定員を守る」という留意事項が付され、受理承認されることになる⁷。

3 1968年度の新聞記事から

3-(1) 今こそ反省の時 学生運動の曲り角(『大東文化』第205号、1969年1月1日、1面、杉能均一(自治会委員長)執筆)

「我々学生は、今こそ事態の急なるを自覚すべきであり、自覚せねばならない。新年を区切りとし、新たな気分で周囲に目を配ってみると、国会すら取り上げざるを得なかった学園紛争の興奮!! 正に風雲急を告げるものがそこにある。我々学生最大の関心事である。目標を誤るまい。[略]われわれ学生は何を目ざして、大学に入学したのであろうか? 大東のみならず、広く日本や世界にまで及んで考えてみようではないか。降って湧くが如くに起こった、フランスの学生運動の昨今、国内においては、新聞の三面記事を連日占拠した『ゲバルト、ヘルメット、反代々木系、代々木云々…』の活字も今は国民に訴える力を半減し、批判を受ける原因に五〇%の推移をみせている。[略]同朋よ、今度は君達が目覚める番だ。冷静になろう そして考えよう 然る後に行動 『鳥倦飛而知

還』好きだった漢文の時間…。若い新任の教師が感無量の表情で解釈した。『鳥は一日中遊んであきてしまうと、ねぐらに帰ることを知っている。人間も進退、出処は自然に行なうべきだナー』と。なぜか、最近よく思い出することである。」

たとえば、1960年代後半から70年代初めにかけての「学園紛争」については、1967年5月10日の合同教授会開催にあたり、金子昇常任理事より、各大学の学生運動の動向に関する警視庁公安部からの質疑を受けて、学生自治会に一方的に任せるのではなく、良識派とされる学生を日頃から育成するよう、「本学もこの問題に関し先生方の一層の配慮を願いたい」旨の要請をしている⁸。

3-(2) 大東砂漠は消えた(『大東文化』第205号、1969年1月1日、4面、川口亮光(中国文学科4年)執筆)

「大東砂漠は消えた。一辺の風がこの西台の町を吹いてわたると、大東の校庭は忽ち砂の乱舞と化し、その中をわれわれは体をコートにすっぽり巻いて風から逃げて走った。これを学生は大東砂漠と呼んだ。しかしそれは既に過去の事。今やこの学園の庭には赤・白・黄・色とりどりの花が自ら笑いを浮かべ、濃い緑色の草樹がいたるところにその姿を競う自然の楽園となりつつある。一日ここにわが身を休ませてもみよ。冬の仕度におくれた一匹のコオロギが草むらの中から頭を出すのも可愛いらしい。[略]そして今、卒業を間近にひかえた今日この頃ではある。[略]この学園生活四年間常に思考しなければならなかった。しかし広い東京における唯一点たる存在の自分は、その方法と場所にまた苦しまねばならなかった。学校と学生の対話不足が深刻な昨今の各大学。せめて明日のわが身を知る場所を自分は求めている。そんなある日つい先日。白いズボンとスコップを片手にした金子教授と多数校庭の植樹に汗を流している姿を見てホッとした。この姿と緑なす校庭は思考の方法と場所をな

にか明示してないか。大東砂漠は消えた。」

3-(3) 学生生活終了を目前に想う 忘れ得ぬ人(『大東文化』第206号、1969年2月1日、6面、佐々木晴治(経営学科4年)執筆)

「私たちが初めてここに来た当時は、西台の町も都内とは思えないような田園の静かな景色を保っていたのだ。[略]その頃の校庭は今のような緑に恵まれたものでなく、俗に言うあの大東砂漠であったから昼休みなどは皆、裏の草原の方へ行ってボール遊びや虫けらなんかと戯れていた。だから生物学の材料にも事欠くことはなかった。そしてまだ、体育館も完成してなかったから、冬でも体育実技は寒風吹き荒ぶ屋外で行なわれた。掌をこすりながらゴルフのクラブを握り、何度も空振りを繰り返し先生や友人に大笑いされた。この時はあの小さなボールが恨めしく見えた。昼前の講義中、空腹に耐えかねて、廊下側の窓からそっとエスケープしたところを先輩に見つかり、ゴツンとやられたこともあった。そんなことをしているうちに、年月は過ぎ何度か学生の新陳代謝が行なわれ、ついに今度は私たちが古い細胞として新しい細胞のためにこの住み慣れた場所を離れる時が近づいた。」

3-(2)や3-(3)で挙げられている「大東砂漠」については、板橋校舎ができた当時大学周辺一帯は田んぼで、風がつよい日には校庭では砂塵が舞う状況であったとされる。しかし植樹を始めとした学内関係者らによる尽力の効果もあって、板橋校舎の教育環境も次第に整備されていくことになる⁹。

4 1969年度の新聞記事から

4-(1) 書道文化センターを新設 さらに充実した活動はかる 所長に青山杉雨教授が就任(『大東文化』第209号、1969年5月1日、3面)

「本大学に、多年要望されていた書道の総合機関『書道文化センター』が設立され、所長には日本書道の第一人者、青山杉雨が就任された。ご

承知のごとく、大東文化大学は創立以来、書道の重要性を痛感し、学内にあっては、斯道の権威を網羅して、書道教育講座の充実を図り、数多くの人材を育成輩出するとともに、学外に対しては、書道公開講座の開設、全国学生書道展及び、書道学会等を開催し、斯道振興の為に傾注して、いく多の成果を挙げている。従来、本学には大東書道研修所が設置されており、前記の対外活動を企画実施していたのであるが、この度当該研究機関を改革充実するために『大東文化大学書道文化センター』として新たに発足することとなった。ご承知のごとく、日本民族教育の根幹たる書道も、戦後、GHQ 政策に一時軽視されていたが、先の中教審発表にも示されている通り、その必要性が再認識され、四十六年度より小、中学校においても必修教科として隆盛の一途を辿らんとしている。この機に際し、本学は東洋学術文化の伝統を守り、書道芸術の高揚及び書道教育の振興を図り、世界文化の発展に寄与するために『書道文化センター』を開設した訳である。」

4-(1)で挙げられている書道文化センターの設立については、「青山文雄(杉雨)教授と永井敏男(暁舟)講師(のち助教授を経て教授)が中心となって進められ、これを松井郁次郎(如流)教授(のち名誉教授)と今関茂(脩竹)講師(のち教授)が側面から支えられた。[略]書道文化センター構想の中心となって尽力された青山教授は開設と同時に所長、永井講師は事務長として直接書道文化センターの指揮運営に当たられ」たとする¹⁰。1969年10月には、当時の会員数5000名を対象とした月刊書道誌『大東書道』を創刊する。青山所長が、厳格な級位認定を目的として発案刊行されたものである。本誌の特徴は、一般部のお手本をすべて日展審査員以上の先生がたにお願いしていることなどによく表れているだろう。

4-(2) 法人 自治会要求に回答 教授・講師陣を強化 図書を整備 普通教室増設など 実現に全力 金子[昇]理事長談(『大東文化』第

213号、1969年10月1日、1面)

「自治会からの要望については十分に諒解しているし、現に全力でその努力を続けております。教員の増強については、以前から教授会とも会合を重ねながら人選をし、交渉もしている。ただ、みなさんもお承知の通り、近年は雨後のタケノコのように大学がたくさん出来、教員が極端に不足しているのでなかなか簡単にはいかない。学問の造詣も深く、教育に熱心で、その上に青年を愛する人物でなければいけないのだが、相手にもいろいろ条件があるので、一挙に実現することは困難です。しかし最近その努力が実り、来春には立派な方々がみえることになったので安心しています。教室の整備についても、すでに建築屋さんとの協議を重ねており、落ちついて勉強が出来るようにしたいと思っています。部室も長い間の夢でしたが、本年五月、ようやく建ペイ率の改訂が成立したのでさっそく交渉を開始し、今日では工事も大体完了しました。何しろたくさんの部があり、全部が満足することはなかなか簡単ではありませんが、お互いに譲り合って仲よく利用していただきたい。なにぶん私立学校は国立と違いすべて自前でやってゆかなければならないので、人知れぬ苦勞が多い。しかしわれわれは喜びも悲しみ学生諸君といっしょになっていこうと思っています。幸い、本学の学生は真面目で、礼儀正しくしかも紛争がないということで社会の信頼も高まってきている。とにかくみんなで力を合わせ、常に明るく、そして楽しい学園を作ってゆきましょう。」

第5代の金子昇理事長(在任1969年5月～1979年7月)は、大東文化学院本科11期の卒業生で、1955年から本学で働き戦後の本学運営を支えた主要な人物である。板橋校舎での熱心な植樹作業(3-(2))を始め、東松山校舎の整備推進(1-(3))や学生らのスポーツ活動奨励など、愛校心に溢れるように全学挙げて「力を合わせ、常に明るく、そして楽しい学園」作りをとくに目指したといわれる。

4-(3) 学生生活調査報告(2) 教養 機会を作る努力 人生を浪費せずに(『大東文化』第215号、1969年12月1日、3面、三上紀史(英米文学科助教授)解説)

「この『学生生活調査報告』は、各方面から関心を示されているようである。第二回目の本号からは、前に紹介した調査表にもとづいて、本学の教師および学生の立場からの見解を求めることにした。今回はまず被調査学生の反応状況を領域順に上位から三位まで(修学・教育内容及び方法・教養)をとりあげた。意見を述べていただくのは本学英米文学科の助教授三上紀史氏である。[略] 教養 ◇①教養をもっと高めたい◇この項目は全三六〇項目中の第二位にランクされている。教養を高めたいということは、ほとんどの者が望んでいることなのでこういう上位をしめたのだろうが、そのためきわめて大ざっぱないい方の項目になってもいる。ゲーテは『自分の心を他に伝えるのは、人間の天性である。伝えられた通りに受け入れるのは教養である。』といている。ところで教養とは何か。ここでことばの定義するのはひかえよう。ただアリストIPPスは言っている。『無教養であるよりは、乞食であった方がましだ。なぜなら、後者に欠けているものは金銭だが、前者に欠けているものは人間性なのだから。』おそらく教養とは人間らしくあるための知識だろう。現代では人間らしくあることがむづかしくなった。この調査でも『教養』の領域が十二の領域中の三位をしめたのは、人間らしくありたいという根源的な欲求のあらわれだろう。この調査の回答は、何か人間らしいことをやりたくてもできない、あるいは機会がないという悩みを訴えているのがほとんどである。[略]しかし問題は機会をみつける努力であって、人間は深刻に何かやりたいと思えばどこかでその機会をみつけるものだ。」

学生相談室が全学生を対象にして実施した「学生生活調査」は、学生の5割以上1691名の回答に基づいて大東大生らの意識傾向が分析公表

されている。学生からの大学教育への要望としては、「学生の要求にもっと関心をもってほしい」「大量生産的な講義のやり方には不満」「もっと先生と個人的に話し合いたい」「もっと有能な先生がほしい」などが挙がっている。

5 1970年度の新聞記事から

5-(1) 専門・教養を一本化 新しく教養課程委員会(『大東文化』第219号、1970年4月1日、1面)

「さきにかかれた本学合同教授会で、専門教育と一般教育を一本化する新方針が打ち出された。これは従来の大学教育への反省、対策として中央教育審議会などでも採り上げられている問題であるが、新制大学において教養部門と専門部門をそれぞれ独立して併立させて来たのを、大学教育という流れの中で一本化しようという狙いによる。このため本学の場合は、これまで教養部という呼称で専門部と対置していた教養課程二カ年間の教育コースを、経済・文学両学部のもとに吸収、これを一本化することによって空気の流通をよくしようとするもの。その結果、教養部の名称を発展的に解消して新しく『教養課程委員会』を設けた。同委員会の委員長にはこれまで教養部長であった酒井清六氏(経済学部教授・農博)が専任され、経済・文学両学部(主として一般教育語学、保健体育を担当)の教員から三十余名の委員を選出して委員会を構成、両学部長のもとにおける諮問機関としての役割とともに教養課程の運営に当ることになったが、この機構改革は、今後の大学教育の運営に新生面を開く勇断としてその成果が期待されている。」

5-(1)で取り上げられているように、1967年4月東松山校舎の開設とともに、教養部も始まっている。文学部・経済学部の学生が共通して教養課程を履修するため、運営面で支障のないように「両学部教養課程(主任)をまとめて教養課程委員会(仮称)を設け統轄する必要がある」

とし、1970年4月教養課程委員会を新たに設け、専門課程と教養課程の大学教育の一本化をはかることを目標としている¹¹。

昭和43年7月31日

大東文化大学
文学部長 影山 篤一 敬
経済学部長 高橋 勉 敬
教養部長 村田 寛 敬

南条 隆 男
理事長

学則の一部改正、課程の一部改正及び編制の決定について（回答）

このことについて教職より昭和43年7月16日付村田文書により回答されたこと、九学期の一部改正、講義科の一部改正及び編制の決定については昭和43年7月27日の理事会、評議員会及び7月31日の学則審議会（選挙会より諮問）において、先づ下記の通り一部改正を承認し、誠に決定いたしましたのでここに回答いたします。

記

1. 大東文化大学学則（含む学則）の一部改正については、別表一（別表二大学院修士課程（関連科目）及び大学院博士課程（関連科目）の改定については取寄添付）を承認する。その他については協議として決定を要するもの、教養課程は別として一般教育科目（関連科目、保健体育科目）であり、講義科の学生が受講してこれを履修するため、取寄の通りに講義科に於て教

養課程（主任）を置くことはかえって複雑性をきたす恐れがあり、取寄添付でも次第を出すことも考えられるので、同学則教養課程（主任）をまとめて教養課程委員会（併修）を設け統制する必要があると思われる。よつて本件について再度検討されるむとが望ましい。併列時に教養課程委員会（併修）決定を要しない。協賛の義務に支障のない限り万全の措置を講ぜられたい。

2. 大東文化大学教養課程の一部改正についても学則と関係があるもので再度協議をつくられたい。

3. 大東文化大学教養課程の改定については原案通りこれを承認する。

4. 大東文化大学外国人留学生に開する課程の決定については原案通りこれを承認する。

なお附り添付の学則料は24,490円、別添付の関連科目料は1,500円とする。

（1968年7月31日、文学部長・経済学部長・教養部長への南条理事長の回答）

5-(2) 体力と健康とは別もの 医務室と学生とは選手とコーチの関係と同じ（『大東文化』第222号、1970年7月1日、9面、小野エイ子（定期健康診断実行委員会）解説）

「あなたの体が、病気に対して安全な状態で保持されるためには、管理するものとされるものが、共に二人三脚の気構えで常に歩むのでなければならない。それは運動選手とコーチとの関係に似たものである。[略]それはちょうど医務室において、私とあなたと共に話し合い歩むということは、フォローアップがなされるということである。医務室側からは必要な治療や、又は健康指示や中間的な治療を受けるように説明するが、管理されるあなた方も体の状況や受けた指導による反応具合を医務室に連絡することが必要である。健康な体を安全に保つためには、たまたま症状のあるときに精密度の高い治療をうけるだけでは駄目である。あなた方と医務室とが緊密に結ばれて、互いの消息のコミュニケーションが保たれた上で、タイミングよく検査することが大切である。[略]今日多

くの人がもっている重大な誤解は、体力をつけるということと、健康を維持するということを同一に考えているということである。[略]いくら筋肉が発達し、長距離のランニングや歩行にも疲れなくなったとしても、内蔵疾患等の病気(高血圧・心病・胃・腎病)がおさえられるものではない。体力がどんなについても、病気はそれに関係なく病状は進行していく。つまり体力[と健康]は、見かけの頑丈さ、鍛えた皮膚の色つやのこととは問題が別なのである。[略]あなた方は、外見上の強健さに目をうばわれ、それが健康のシンボルであるように考えている場合が多いようだが、身体活動による体力の向上と、からだの内蔵の健康とは、別の世界に属すると考えるべきだと思う。体力も運動のスタミナ源となるという意味で、学生生活の上では重要であろうが、体が細くてやせていて、体力的にはいかにも貧弱のように見えても、体のどこにも欠損がなく、大変健康であるという人もたくさんいるということを知っておいていいであろう。」

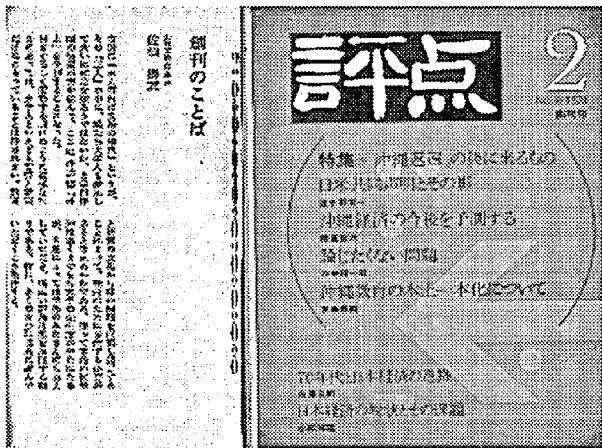
全学皆受診を趣旨とする定期健康診断は、「学校保健法」に基づいて毎年実施されているものである。しかし、1970年度における本学での定期健康診断の受診率は全学生の68.3%にすぎず、学生自身の健康意識の希薄さがうかがえよう。そのような状況に対して、5-(2)では自分の健康に若いといって勝手に思い込みや過信するのではなく、日常の健康に対する心構えの大切さを強調し、医務室での適切で専門的な助言などをよく参考とするようもとめている。

5-(3) 大学の評論誌「評点」に望むこと 提言 個性を堅持(『大東文化』第223号、1970年9月1日、5面、三上紀史(英米文学科助教授)解説)

「『評点』を読んでみると、大学の先生たちの書いた、現代の社会問題に関する論文集という感じがする。大学の先生たちは、時の問題とは直

接関係のない純粋な学術論文を書きなれているはずである。そういう先生たちが、時をながめ論じなければならない時代となった。佐伯[梅友]学長が『創刊のことば』でいっておられるように『大学人といえども書齋と教室だけにこもっていることは許されまい。教育と研究の立場から時の問題を直視し発言することによって、社会のために奉仕する』ことが必要となったのである。こういう意図のもとに編集された『評点』の斬新さを高く評価したい。ただ問題となるのは、先生たちが学術論文ならぬ、時の社会の問題を論じなければならない点にあらう。現代がそれを必要としているならば、『評点』は大学の先生たちの現代をみつめる訓練の場とすることもできる。それぞれ専門の立場から社会をながめる場ともなる。もちろん、研究が時の問題に常に関係している場合は問題はないし好都合でもある。読んでみるとやはり政治、経済、教育問題に関するものが圧倒的に多く、文学や芸術に関するものはほとんどない(随想の中のものを除けばわずか一編だけあるが、それも現代の問題をあつかっている)。だからといって、これからの『評点』に、そういう評論をたくさん載せるべきだというつもりはない。そういう評論はそれに適した雑誌に載せればよいのである。あくまで『評点』は時の問題に関する評論集という姿勢をくずすべきではない。それは『評点』の個性的色彩を堅持していく方がよいと思うからである。『紀要』のようなものになってゆけば、必ず個性を失ってくるからである。もう一つは、常に学生諸君に読んでもらうことを頭において編集されるべきである。それは程度を低くするということではむろんない。学生を意識しすぎて、教育してやろうという態度がみえたり、やさしくしたりするとかえって学生から見放される。『学生』という読者を忘れて最高のものを書くことが、かえって学生の読者を得るのである。学生諸君の大多数はもっと生活に密着した卑近な問題に関心があるかもしれないが、そういう関心は別の雑誌にまかせておけばよい。『評点』は学生諸君が現代の問題を真剣にみつめるための手だてとなるよう編集されるべきである。今、この『評点』

がどれだけ売れてどれだけ読まれているか知らないが、売れる売れないは二の次の問題である。読んだ限りでは、載せてある評論は力作で重量感のあるものが多い。総じて現在の姿勢を堅持してゆくことを望む。だんだん軽いものになって、軟化していったら、週間[ママ]誌みたいにならないよう気をつけてほしい。」



(大東文化大学広報室『評点』創刊号、1970年)

大東人による評論誌というキャッチフレーズで、「教育と研究の立場から時の問題を直視し発言すること」を目標として、1970年2月に刊行された月刊誌『評点』(大東出版センター)であったが、経営上の問題から発行回数19回、1年7ヵ月間で廃刊することになる。しかし、短期間ながらも、社会と大学との接点をもとめようとした大東文化大学の『評点』発刊の試みは重要であろう。

6 1971年度の新聞記事から

6-(1) 大東文化大学父兄会 要望意見や提案でナマの声を聴く効果をあげた支部総会(『大東文化』第228号、1971年4月1日、6面)

「四十五年度の地方支部総会は、昨年七月十八日から八月二十三日までの間に終了(関東地区だけは九月)した。そしてその報告会が大学側では八月二十五日に、父兄会側では五月[ママ]十五日にそれぞれ行われたが、今回は大学側から教学関係、事務関係、専任の教授および職員、父

兄会側から本部理事のうち一人が代表で各総会に派遣され、親しく現場で各父兄のナマの声を聞きながら、大学の現況報告や学習・就職・生活指導等の諸問題を中心に熱心な懇談が交わされた。各支部総会で提案された要望提案事項の主なるものは次の通りである。

教務課関係 ◇教授の欠講[ママ]などで、学生が単位取得に支障を来たさないように配慮してほしい。◇前期末の試験の結果を十一月発表するようにしてほしい。◇追試については、事前に父兄に知らせてもらいたい。◇学生の出席状況をクラス担任からでもよいから知らせてほしい。またクラス担任がきまったら、そのクラスの父兄に知らせてもらいたい。◇教育実習の期間と一流企業の採用試験が重複しないように配慮を希望する。

学生課関係 ◇子弟が他大学の紛争に巻き込まれないに注意してほしい。また当学園での紛争を起さないように指導してほしい。(とくに北海道支部から要望書が提出された)◇学内食堂の品質の向上をはかってもらいたい。◇学生寮の問題点として、食事の量をふやすこと、入浴できる便宜、電話の取りつき等々の改善をはかってほしい。◇地方から上京している学生の場合、親と子の対話の機会が少ないので、子供が思想的に偏向しないかと心配である。◇女子学生の寮および下宿の確保を希望したい。◇クラブの強制加入等のないようにしてほしい。◇地方から上京している子弟は万事に不案内なので、良い相談相手になってほしい。

就職課関係 ◇地方の企業体にも就職できるよう求人の開拓を希望。◇学内での就職模擬試験の実力が、就職試験にも適用できるようレベルアップしてほしい。◇公立学校教育[ママ]採用試験に合格できるよう対策をとってほしい。◇教員の就職については、同窓生と綿密な連絡をとり万全を期すこと。◇就職決定後の追跡調査を希望。◇地方の同窓会と父兄会の合同会を開いた方が、就職等の協力が得られるのではないか。連絡を密にする必要がある。

父兄会本部関係 ◇各支部の会費を本部で徴収し支部へ還元してほしい。◇支部総会関係の連絡は、十分に時間的余裕のあるようにしてほしい。◇郵政会の会合が支部総会の前日に行われるので、当日

の出席が少ない。なんとかならないか。◇父兄会員名簿の誤りを出来るだけ少なくするよう。◇新入学確定者の名簿を支部単位で連絡してもらえれば、各支部毎に入学者や父兄のオリエンテーションをやってもよい。◇支部総会はできるだけ七月中を望む。その他一般関係 ◇大学の近況についてパンフレット等の作製配布を願いたい。◇授業料の再分割払いが出来るよう配慮してほしい。◇支部の総会には、その地方の特性を勘案し、関連性のある先生の派遣がのぞましい。◇広報活動をもっと活発にしてもらいたい。」

1961年に相互父兄の連携を深める必要があるとして設立された大東文化大学父兄会は、1963年に北海道支部が発足してから1972年の奈良支部の結成をもって、全国47都道府県の支部組織が整備されることになる。大学創立50周年記念事業にも積極的に協力し、群馬県嬭恋村に嬭恋セミナーハウス(1975年5月竣工、7-(3))や板橋区徳丸2丁目に大東文化会館(1976年12月竣工)を寄贈建設する。1973年9月には、『大東文化大学父兄会十年史』を纏め刊行している。

6-(2) 外国語学科を学部に来年度からの昇格申請(『大東文化』第232号、1971年9月1日、1面)

「本学ではかねてから、文学部の外国語学科を独立学部にしたいと準備を進めてきたが、その体制固めも完了したので、文部省に対し来年度からの学部昇格の申請を行なった。正式認可をまって、来年度は新しく外国語学部(仮称)としての学生募集をすることになる。本学の外国語学部は、去る43年度から文学部の一学科として開設され、中国語学と英語学を併置、経済関係の諸科目を履修することにより、国際的視野を持つ人材の育成に努めて来た。こうした線に沿った人材養成は、急テンポで国際化する社会情勢の中でいよいよ重要性を増しているため、この社会的要求に応えるためにも規模の拡大と教育内容の充実をはかる必要が

あるとして、学部昇格へ踏み切ったものである。新学部が発足すれば、中国語学科と英語学科の二学科をもって構成されることになる。そして両学科とも新時代にふさわしい学科目を配し、特に語学演習には重点をおき、本学の誇る LL 授業と相まって、卒業時までには英語あるいは中国語の高級会話に習熟できるような集中訓練を行なうという。英語は言うに及ばず、日中国交回復も近いと見られる現在、中国語の練達の士に対する社会的需要も当然高まろう。さらに同学部では古典文学、現代文学、経済学、経営学など教養と実務面の教育にも力を注ぐと共に、これも本学の特色の一つである日本語教師の志望者のためには、海外における外国語としての日本語学、日本語教育法等の科目も特設することになっている。」

1972年4月、「文学部に開設している外国語学科を一部発展的に改組し設置するもので、建学の精神に基づき、学問の理論と応用を教授、研究して真理と正義を愛する自主的精神に充ちた良識ある人材を育成し、文化の発展と人類の福祉に貢献することを目的と」（設置の目的）した外国語学部（中国語学科・英語学科）が開講する。文学部外国語学科を発展的改組（廃止）して外国語学部を設置することは、1970年6月の理事会にて、関係施設設備の整備、購入図書及び学術雑誌の充実、教員組織の拡充などの転換が十分はかれるものとして決議された措置である。

6-(3) 懐かしの50年前の面影 大東文化学院本科第一期生の集い（『大東文化』第232号、1971年9月1日、7面）

「本学の前身、大東文化学院の本科第一回卒業生の面々が、全国から集まってさる八月六日に初会合を開いた。大正十二年に学院が設立されると第一期生として入学、三年間の学業をおえて巣立った人々。二年後に創立五十周年を迎えようとしている学園の歴史をそのまま象徴する大先輩たちである。いま共立女子大教授の時枝満康さんらの呼びかけで顔

をそろえたのは総勢十六人、本学文学部長の影山誠一さんもその仲間で、まずこの日は母校訪問からはじまって板橋、東松山、両キャンパスを見学、外観、内容とも見違えるように発展した母校の姿に目を見張っていた。夕方からは、市ヶ谷の私学会館で、学園から神立常務理事(本科三期)、坂本大東一高校長(高等十三期)をお客さんに加えて懇親会が催された。何しろほとんどが卒業以来四十余年ぶりの再会とあって急には顔と名前が一致しない。そこで自己紹介ということになったが、半世紀も前の学生時代の自分を学友に思い出してもらうのに五、六分間ではどうにもならないらしく、中には三、四十分間にもわたり延々と半世紀を語る人もあって世話役の時枝さんをやきもきさせ、一時間半も予定を延ばしてからやっと懇親の盃をあけたという次第。そのころには互いに学生時代の面影も思い出されて来たらしく、なつかしい九段時代の懐旧談に花が咲き、定刻ぎりぎりまで和やかな談笑がつづいた。」

6-(3)にあるとおり、本学の文学部教授を務めた影山誠一も学院の本科1期生である。影山の証言によれば、千葉師範学校を卒業して千葉県の小学校教員(訓導)を務めていたころ、新聞で新たに漢文の専門学校ができて生徒募集を行うという記事を見て受験したという。小学校教員を辞めてまで大東文化学院を受験しようとした動機について、「気に入ったのは何より給費制度でした。本科生は月額二十五円—三十五円、高等科生は五十円—八十円を支給し、教科書もタダというのですから。」と、影山は率直に述べている¹²。

7 1972年度の新新聞記事から

7-(1) 語学センターを開設 語学研修や留学の推進・相談役に
(『大東文化』第238号、1972年5月1日、1面)

「新年度を期して本学に『語学センター』=真田幸家事務長=が開設された。外国語学部の新設によって本学の指向する教育の国際化への道が

いよいよ明らかにされたが、これに伴い必要とされる教科外の諸対策を受持つのがこの語学センターである。同センターの基本方針には、『本学の学生・教職員の国際人的教養を昂揚するため、学園内外の渉外事項を処理する』とあり、その具体的な事業として、一、海外の諸大学への研修または留学を希望する者に対しての相談に応じ、そのための渉外事務および学園内諸機関との調整をはかる。一、外国人学生の本学への留学希望者に対し、本大学の事情説明およびその紹介を行なう。一、教科外の語学研修希望者のための語学講習会をひらく。一、本大学に在学中の外国人留学生に対して日本語の講習会をひらく。などがあげられている。つまり語学センターが対象とするのは、本学教職員・学生の海外研修および留学、外国人学生の受入れ、在学中の外国人留学生に対する日本語教育、在学生への語学講習という幅広いものとなる。なお語学センターは当分の間、板橋校舎の広報室内に仮事務所をおく。」

7-(1)にあるとおり、開設当時の語学センターには専用施設の教室も用意されておらず、有益な語学力を向上させていくうえでも「この部屋に来れば自由に外国人学生と会話が出来、意見の交換が出来たり、時に互いにレクリエーションも出来るよう」な施設設備の充実が望まれていたのである¹³。

7-(2) 法学部新設を申請 法律学科 来年度から開講へ 東松山に新校舎(『大東文化』第243号、1972年10月1日、1面)

「本学はさる九月三十日、文部省に対して来年度からの法学部新設を申請した。本年度の外国語学部および教育学科の新設につづき、法学部の新設はかねての懸案だったもので、これによって本学は四学部となり、文科系総合大学の実現へさらに一步を進めることになる。法学部は法律学科の一学科だけで構成され、学科内容は法哲学、法制史、国際法などを土台に公法、私法の両面にわたり法律人を育成することを目的として

いる。予定されているコースは、司法業務の法律学、官公庁の行政法学、会社経営上の経営法学などである。これにともない東松山の教養課程に法学部予定校舎(三階建、一三八一平方メートル、11 教室)の校舎の建設が着手された。認可後の試験日、試験科目はいずれも経済学部基準(別表を参照)予定であるが、詳細については認可後発表される。」

将来の計画として、すでに本学では 1968 年度からの法学部法律学科の開設を計画していたのである。しかし、計画は曲折を経てすぐには実現には至らなかったのである。1972 年 6 月の理事会にて、法学部設置の申請が議決される。なお文部省からは、法学部設置認可にかかる留意事項として、(1)五十周年記念館及び建築中の東松山五号館を計画どおり完成すること(2)図書は計画どおり購入、整備すること(3)既設学部を含め入学定員を守ること、の 3 点が掲げられ認可されたのである。

7-(3) 待望の二つの会館の建設 記念館は八月に完成 桐朋会館
浅間望む閑静な地に(『大東文化』第 245 号、1973 年 1 月 1 日、6 面)

「いよいよ大学創立五十周年の年を迎えて、記念事業計画も急ピッチで進んでいる。中でも板橋校舎へ建設される記念館と群馬県下へ建設されるゼミナール会館(桐朋会館)の計画は全学をあげて待望していたもので、その完成が待たれるが、父兄会、同窓会などの強い協力によって両施設とも実現の緒についている。五十周年記念館 [略] 桐朋会館 父兄会の厚意によって寄贈されることになっており、『桐朋会館』(仮称)という名称で秋の創立記念日までには学生諸君に利用してもらう予定で準備がはかどっている。桐朋会館ははじめ東松山キャンパスに隣接する校有地に建設する予定で発足したが、既報のように地域関係の事情から群馬県下の第二予定地に建設することに計画変えになった。同地は群馬県吾妻郡嬭恋村にある五ヘクタール(約一万五千坪)程の土地で、これまでである鉾山会社で使用してきたところ。[略]その計画によると、同地には会

社側がクラブハウスとして使用してきた建物や、村が鉾山側子女のために設けた小学校などがあるので、これら既存の建物を一部改築してとりあえず使用する。そしてクラブハウスの場合は中に映写設備まであるので、ここをまずクラブ、集会場、修練道場などに、小学校校舎を学生の宿舎に模様がえして使い、さらに第二段階として新会館の建設に着手する運びになろう。父兄会では第一段階の改造工事を急ぎ、できるだけ早く学生に利用してもらいたいとしている。」

大東文化大学父兄会は、群馬県嬭恋村に嬭恋セミナーハウス(1975年5月竣工)と板橋区徳丸2丁目到大東文化会館(1976年12月竣工)を寄贈建設する。大東文化会館の完成にあたっては、「白を基調としたモダンな建物で、会館横にはスクールバスのターンテーブルが作られ、板橋校舎との交通ターミナルになっている。落成式には地元の板橋・練馬両区議会関係者、町会商店会の代表などを招待し、本大学関係者、父兄会役員、建築・設計関係者が出席して祝賀会が開催され、本学園理事長から会館建設に貢献した本大学父兄会、間組、シンポ建築設計事務所に感謝状と記念品」の贈呈を行っている¹⁴。

8 1973年度の新聞記事から

8-(1) 50周年を祝う 全学を挙げて誓いを新たに 見えない面に努力(『大東文化』第253号、1973年11月1日、1面、佐伯梅友(大東文化大学学長)執筆)

「五十周年を迎えたということは祝賀すべきことに違いない。特に本学の場合は、そう思われる。今から十三年ほど前では夢としか思われなかったであろうと思われる今日の状態に到達したのだから。それにしても、戦火に焼けただけでなく、純然たる私立学校になった後の十五年ばかりは、どんなにしてもちこたえて来たのであったろうか。ほんとうに大変なことだったろうと思われる。私が専任となって本学に来たころも、

その名残は見えて、ある程度は推測されるのであるが、とにかく、これを潰してはと、歯をくいしばってもちこたえて来てくださった方々のことを、まず思わなければならないと思うのである。板橋の地をトとしての新しい出発が決断・実行されたのも、そうした苦しい時期があったればこそ、ということになるだろう。その後の当事者の労苦、それは一般に目に見えないが、それと、教職員・学生・父兄・卒業生の協力があって、今日の状態が得られた、ということになる。だからといって、これをただ祝えばよいものではないだろう。われわれは、われわれの大学をいっそうすばらしいものに成しあげるべく、努力しなければなるまい。今までの努力のあとが、だれの目にも見えるような面での発展であるとするなら今後は、むしろ、あまり人々の目には見えない面で、ますますすばらしくなっていくように、努力をしなければならないと思うのである。」

1973年10月30日、本学創立五十周年記念式典が挙行される。会場である板橋校舎大講堂には、奥野誠亮文部大臣を始め来賓、同窓会員、父兄会員、教職員、学生代表など総勢2千人が集まり、記念式典がとり行われている。なお式典では、本学への功労者らとして、岸信介(後援会長)、福田赴夫(同副会長)、平島敏夫(元学長)、芳野国雄(郵政会長)に対して感謝表彰している。

おわりに

本稿で取り上げた1966～1973年度の時期は、戦後本学が池袋から板橋校舎へ移ってから、さらに東松山校舎も開設するなどして、学園施設の整備拡充を積極的に進めた段階である。しかし、「これ以降、拡大発展してきた学部・学科の増設はにわかにはブレーキがかか」ったといわれる¹⁵。この点については、次号以降で検証していきたいと考える。

-
- 1 「大東文化大学後援会発会式速記」『大東文化大学五十年史』1973年9月、558頁。
 - 2 「大東文化大学後援会発会式速記」『大東文化大学五十年史』1973年9月、560～561頁。
 - 3 『東松山校舎における交通事情 バス問題理解のために』1971年4月。
 - 4 「東松山校舎開設時の通学バス問題」『大東文化大学の歩んできた道』2016年3月、77～78頁。
 - 5 『大東文化大学七十年史』1993年9月、161頁。
 - 6 武井亮吉『うたかたの記』1974年、9～10頁。
 - 7 『大東文化大学五十年史』1973年9月、753頁。
 - 8 文学部経済学部合同教授会（常任理事説明資料）、1967年5月10日。
 - 9 『大東文化大学七十年史』1993年9月、74～75頁。
 - 10 『大東文化大学七十年史』1993年9月、581～582頁。
 - 11 理事長南条徳男から文学部長・経済学部長・教養部長への回答、1968年7月31日。
 - 12 「母校の半世紀（1）」『大東文化』1972年2月1日、1面。
 - 13 『大東文化大学五十年史』1973年9月、983頁。
 - 14 「大東文化会館が落成」『大東文化大学報』第16号、1977年1月1日、2頁。
 - 15 『大東文化大学の歩んできた道』2016年3月、75頁。

The History of Daito Bunka University viewed from the University Newspaper “Daito Bunka” (1966 ~ 1973)

Muneo Tanimoto

This report considers the early phase of the Itabashi Campus and Higashimatsuyama Campus era of Daito Bunka University through the lense of the University Newspaper “Daito Bunka” from 1966 to 1973. These years have been a stage of proactive improvement of school facilities.

On October 30, 1973, a ceremony commemorating the 50th anniversary of Daito Bunka University’s foundation was held at the Grand Auditorium of Itabashi Campus. This event was attended by around two thousand people, including the Minister of Education, many alumni, parents, faculty members, and student representatives. It has been said, however, that the expansion of faculties and departments, which have prospered before, has suddenly stalled in the following years.